

新九郎通信



発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

曾我の梅まつり 松田の桜まつり、瀬戸屋敷の雛祭り・・・春を告げる地域の祭りが、春を待ちわびていた人々で賑わっています。花屋の店先には色とりどりの花々が並び、春の訪れに心が華やぎます。

3月は また日本人にとって特別な月になりました。春を待つ被災地の皆様に、1日も早く本当の春が訪れることを願いながら、あの日のことを忘れないようにしようと、心新たにする月にもなりました。

3月、新九郎、近隣ギャラリーも楽しい企画が目白押しです。作家たちの「春」に出会いにお出かけ下さい。

新九郎 3月の展覧会のご案内

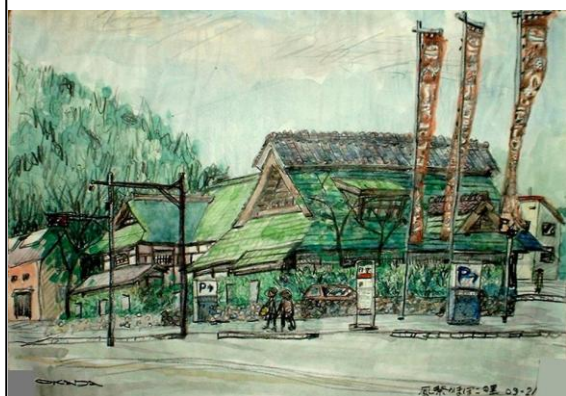
近隣・友の会会員の展覧会情報

会 期 展覧会名	見どころ
3/6(水)～11(月) 第17回西さがみ文芸展 覧会	特別展[4時8分の男 山田太 一と西さがみ]会員の作品展: 俳句・川柳、短歌、書画他
3/13(水)～18(月) 鈴木隆作陶展	青瓷・米瓷・練り込み、端正な 美しいフォルムは気品があり、 青瓷に深みが増しました。
3/20(水)～25(月) 第9会スケッチングウ ーク展	小田原第1.第2.第3グループ 湯河原第1.第2グループ 賛助出品 松野光純 川合昭二
3/22(金) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ! 18:15-20:45 会費 1500 円 コスチューム、固定ポーズ
3/27(水)～4/1(月) 第11回神奈川の自費出 版フェア	神奈川に関する内容の本や、地 元の人々が自費出版した本が、一 同に集まる。自費出版セミナー開催

会期・展覧会名	会場
3/5(金)～3/7(日) 八十歳 感動の一人展	アオキ画廊 2F 0465-22-0825
3/6(水)～3/11(月) 着物リメイク とビーズアクセサリー作品展	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
3/21(木)～3/24(日) 書芸香風会展	アオキ画廊 1・2F 0465-22-0825
3/28(木)～3/31(日) 第1回青春の旅路マップ展	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
3/27(水)～4/1(月) 水香会展	お堀端画廊 0465-23-7819
3/5(火)～3/17(日) たきのたかき展	すどう美術館 0465-36-0740
3/19(火)～3/31(日) 石田勝也展	すどう美術館 0465-36-0740
3/1(金)～3/31(日) 井上浩明水彩画展	「むーにゃん」二宮駅前 0463-71-8224
3/15(金)～3/26(火)水木定休 伊志良杏子金工展 夜の惑星	ギャラリーさざれ石 0463-67-9662
3/15(金)～3/17(日) 千草書展	小田原市民会館 2F 展示室 0465-22-7146
3/11(月)～3/17(日) 第3回秦野展 彩時記(写真)	ギャラリーぜん 0463-83-4031

小田原街なみスケッチ

暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 岡田昌康
第2回「小田原風祭 蒲鉾の里」



「生命の星・地球博物館」と「蒲鉾博物館」へバス見学会で行くとのメールを、孫娘から受取って、久しぶりに風祭へ会いに出掛けた。到着を待つ間、蒲鉾の里の

中を歩き回ってスケッチをした。

秋田から移設された豪壮な書院造りの古民家が東海道沿いに並ぶ伝統的な町並み。石垣と生垣が周りをグルリと囲む。町の周囲は箱根麓の光景。さらには、風にはためく蒲鉾店の高い幟り旗や、P→と書かれた駐車場案内の柱、箱根行きのバス停のポストなど、現代のオブジェが加わる。

古い秋田の建築と、変わらぬ箱根風景と、現代の道具類が、渾然一体に融合し合って作り出す、この独特の町並み風景をスケッチし終えた頃、ちょうどバスが到着した。

思うことなど

横井山 泰

小田原のはなし

昨年の花見「小田原でアトリエがないかな?」「うちの倉庫が空いてるよ」お酒の上での会話を思い出し、市内の友人を訪ねた。指定されたのはスーパーの駐車場で「壁の隙間から日の差するような農機具小屋に車で向かうのだろう」と期待もせず待っていた。ところが、徒歩で現れた彼について行くと、駐車場の奥に巨大な倉庫が現れた。狐につままれたような気分の中に入ると、大空間が広がっていた。

学校を出てから相模原のアトリエには10年近くいた。途中、パリ生活もあったわけだが、とにかく制作場所という相模原だった。パリにいた頃のアトリエは簡素であった、それでも絵を描くには充分で「どこでも出来る仕事」であることに気付いた。帰国後の生活のリズムは拠点を移す方向に進んでいた。新九郎の個展、足柄アートのソウセイカフェでこちらの友人も増えて来た。そんな折の出来事である。ちょうど妻も大井町でカフェをはじめることになって、恰もよしの小田原。物事は案外、決まるときには物凄いスピードで、こちらのペースなんて無視して進むものなのかも知れない。小田原の空の光はなんだか強く明るい。

これから、日々の制作を連載します。どうぞよろしくお願い致します。



茅ヶ崎市美術館視察の報告

おだわらミュージアムプロジェクトでは、「小田原にふさわしい美術館」を考える活動の一環として美術館の訪問を企画している。第一回目は、近隣で小田原と同規模都市にある茅ヶ崎市美術館をお訪し、小川稔館長よりお話を伺った。



温暖な気候、風光明媚な茅ヶ崎は明治以降多くの芸術家や文化人の別荘地保養地として愛されてきた町である。茅ヶ崎美術館は江の島から三浦半島を一望する湘南海岸近くの松林の美しい高砂緑地内にあった。美術館までは、松林の中の庭園に行く。朝から多くの

方の手で美しく手入れがなされていて清々しい。当日は外人観光客や多くの人が庭園を訪れていて、市民の憩いの場所になっていることが感じられた。

茅ヶ崎美術館の開設に至る経過から、運営、作品管理、美術館の活用状況など、美術館の現状について質問をし、小川稔館長はじめ学芸員、事務課長様より丁寧にお答えいただくという形でお話を伺った。

美術館の開設 茅ヶ崎は市民活動が盛んな土地柄で、市民の文化活動も盛んに行われている。先進例として、市民の声から公民館ができたり、郷土資料館設立の会を立ち上げ、市と協働で建設されたりという経緯がある。そんな茅ヶ崎に美術館が開設できたのは、いくつかの好条件が重なった結果だ。まず、美術館建設に前向きな市長の姿勢があった。市民からは博物館の要望が多く、その方向で進んでいたところ、多数の美術品の寄贈により、市民も市も美術館建設の方向で動くようになったという。土地建物はこの地に別荘を構えていた実業家原安三郎氏からの寄贈による。平成10年の開館に向け平成8年に準備室が開設され工事着工。1998年4月茅ヶ崎市美術館は松林が美しい高砂緑地内にオープンした。

運営 建物は市が10億3千万を投じて作り、その後の運営は、財団法人茅ヶ崎文化振興財団が行っている。運営については、平成18年度より指定管理者制度が導入されている。現在組織は館長、学芸員2名、事務局3名、臨時職員10名で運営されている。そのほか、公募によるボランティアのサポートがある。教育普及が目的のアロハ隊(アート・ロハス)は現在31名が登録しアートワークショップなどで活躍している。また屋外アトリエでは、ガーデニング倶楽部の10名のボランティアが近隣の畑や植物の世話をしている。ちなみに平成24年度の予算は約7260万円とのことだ。

展示 展示室は、3室ある。1Fの展示室1(212㎡)で企画展が開催される。地下の展示室2(壁面長45.78m・最大77.22m)は企画展及び一般への貸出もされ、地下展示室3は壁面長22.92mで一般への貸出をしている。1階のエントランスホールは全面ガラス張りです採光がよく明るい。この日は、開催中の企画展「村越襄祈りのデザイン」の美しい作品が展示されていた。ゆとりある多目的なスペースは、アーティストトークや自由に観覧できるスペースとして有効に活用されている。同じフロアには私達がお話を伺った図書コーナー

があり、美術書や当館開催展覧会の図録が閲覧出来る。2階のアトリエは実技講座のほか市民に貸出しされ稼働率60%と高い。他に2階には喫茶を備え鑑賞の後の歓談の場となっている。

作品について 現在 収蔵作品は約1500点。茅ヶ崎ゆかりの作家作品で1300点を収蔵している。温度湿度の保たれた環境で24時間保管されているが、大型絵画や彫刻作品の寄贈により、収蔵庫は余裕のない状態にある。市役所にも収蔵しているものの、不足の状態、常々要望しているがこの点は市が考えていく問題だと言われた。寄贈の申し出があっても条件が整っていないと寄贈されないこともあり、収蔵庫の問題は、どこも大きな課題のようである。

主な作家としては当地ゆかりの萬鉄五郎、小山敬三、青山義雄、三橋兄弟治を収集する。また、茅ヶ崎美術協会の重鎮の作家の作品も収集展示している。現在、美術品購入予算は基本的にはないが、収集方針に沿った作品を市民のために、最小限の拡充を図っているという。また、寄贈については、選定委員会、購入委員会を設け、年に1~2回検討されている。委員長は初代館長、委員には近隣の公立美術館学芸員等に依頼し慎重になされている。

活用状況 美術館は市民には好評で、利用者数は平成23年度は年間3万482人、うち展覧会入場者数は2万人である。利用者の3分の1は65歳以上の方であるが、高齢者の楽しめる場として定着していることがわかる。広報はHPで随時更新しポスターチラシは、市の施設、県内都内の美術館、専門の大学、近隣の小・中・高に送っている。またアトリエは247日のうち60%の稼働率で活用されている。学校教育との連携は、開館当初から力を入れている。出張のワークショップをおこなったり、学校用教材の活用を学校と相談して実施したり、夏休みには「夏の福袋」という児童を対象にした企画を開催し好評を博している。また近隣の学校は来館し美術鑑賞に利用している。小中高生はいつでも無料で観覧出来るというのも嬉しいことだ。

企画展は日本画、洋画、現代美術をからめて一般の方の目線地域ゆかりの作家を中心に1年以上の準備期間をかけて年3回開催している。また美術館を持たない近隣の町(藤沢、寒川、)との合同展も地域として大切な事業であり、持ち寄りの企画展を共催で実施している。今年は「湘南に残る匠の技一宮大工の世界」(藤沢市企画)を開催し話題となった。この日第2展示室では2市1町の高校生による第15回高校生アート展が開かれていた。常設展示はなく、年間企画の中で収蔵品展として開催しているようだ。

茅ヶ崎美術館は、大型車両の入れない道路事情や駐車場が少ない問題、寄贈、収蔵庫、また資料の整理など、課題を持ちながらも、多くの方に足を運んでもらえるよう館長を中心にボランティアのサポートも入ってチームワークで運営されていた。文化活動の盛んな土地がらにあって、これからも多くの市民の憩いの場として、また手作り美術館の良さを生かし、市民協働で広く街の宝物を楽しむ提案に期待したいと感じた訪問となった。(OMP 会員 木下和子)

久しぶりに尾形光琳「紅白梅図屏風」を見た。毎年梅の咲く季節に熱海のMOA(エム・オー・エー)美術館で公開される。美術館へのアプローチは、長いエスカレーターを乗り換え上に登っていく。ゆるくアーチを描いた天井は光に包まれ、刻々と変化する光に誘われる仕掛けが見事だ。

美術館のある丘に出ると相模湾が一望できる。好天で、初島は上から覗き込むように見ることができた。美の殿堂たらんとするかのような丘に聳える美術館の外観は、古代ローマの神殿のようでもあり、海に向かって座るヘンリー・ムーアの「王と王妃」の彫像がよく調和していた。

今回は、国宝「紅白梅図屏風」と所蔵琳派展」と題し、江戸初期先達の俵屋宗達・本阿弥光悦の書画・漆工品から光琳と弟の尾形乾山の書画・陶器・漆工品、さらに百年後の酒井抱一・鈴木其一の画まで琳派の魅力を十分に伝える展覧会となっていた。また、乾山の師である野村仁清の国宝「色絵藤花文茶壺」も展示されていて、見ごたえある内容であった。

「紅白梅図屏風」は最新のX線での調査研究の成果を基に、現在は黒ずんでしまっている川の流水模様を銀色を復元したもので展示されていて、昨年のボストン美術館展の松島図の波濤の表現もダイナミックでおどろいたが、紅白梅図の川も当初このようであったかとその鮮やかさと斬新なデザインにあらためて目を見張る思いがした。

光琳の描線は硬さがなく、軽妙的確かつ大胆であり実に魅力がある。また、古今東西の画を模すなど、研究を重ねていた事も何え大変な努力家であることも知った。

モネ、レンブラントから奈良・平安・鎌倉の美術、中国南宋の陶磁器、平安の書、江戸期の陶芸など幅広いコレクションを見た後は、能楽堂、黄金の茶室などもゆつくりと鑑賞し贅沢な時間を堪能した。

茶室で一服した後、光琳屋敷を覗いた。終の住処となった京都の屋敷を復元したものだ。1階が居住空間で居間、台所、茶室等があり、2階には12畳の画室がある。庭にはいい枝ぶりの梅が咲き、光琳をより身近に感じることができた。

梅が見ごろの外の庭園もまた見事で、久しぶりにゆったりとした時間を過ごすことができた。この地にこれだけのものを残した岡田茂吉の偉業に改めて感謝であった。(展覧会は三月二十日まで、木曜休館)



図屏風」を見た。毎年梅の咲く季節に熱海のMOA(エム・オー・エー)美術館で公開される。美術館へのアプローチは、長いエスカレーターを乗り換え上に登っていく。ゆるくアーチを描いた天井は光に包まれ、刻々と変化する光に誘われる仕掛けが見事だ。